

第 35 回 生活習慣病教室

「胃とピロリ菌」

■日 時：平成 25 年 5 月 23 日（木） 14 時半～15 時半

■場 所：牛久愛和総合病院 B 館 2 階大ホール

■講 師：消化器内科 医長 宮原 直樹

今年の春からピロリ菌の除菌治療の保険適用範囲が広くなりました。今までは胃潰瘍、十二指腸潰瘍などの場合しか保険適用ではなかったものが、胃炎も保険適用となりました。

◆ピロリ菌とは？

胃の中に住んでいる細菌です。胃潰瘍・十二指腸潰瘍の原因となっています。通常細菌は胃酸がある胃の中で生きていけないといわれていましたが、ピロリ菌は粘液の下にもぐりこんで胃酸から逃れることにより、胃の中に住んでいます。さらに、ピロリ菌は自分でアルカリ性のアンモニアを作り身にまとい中和するため、酸性の強い胃の中でも生きていけるのです。

◆感染率

ピロリ菌の感染率は発展途上国で高く、先進国で低くなっています。特に上下水道の普及率の悪いところで高いとされています。井戸水で生活をしてきた人は感染している可能性が高いです。そのため、日本では若い世代の感染率は先進国と同じですが、50 代以上の方は感染率が発展途上国と同じという結果が出ています。大部分が 5 歳くらいまでに感染します。体の免疫機能が出来上がっていないうちに胃の中にピロリ菌が入ると慢性的に住みつくとされています。大人になってからピロリ菌が入ってきても急性胃炎にはなりますが慢性的な持続感染には滅多になりません。

病気との関係

◆胃・十二指腸潰瘍

ピロリ菌の感染率は胃潰瘍で 80%、十二指腸潰瘍で 90%といわれていますが、実際に潰瘍を発症する人はピロリ菌感染者全体の数%程度です。ですので、ピロリ菌がいるから必ず潰瘍ができるというわけではありません。ピロリ菌除菌によって潰瘍の再発予防効果があるので、潰瘍が治った人も除菌が必要です。

◆胃癌(早期胃癌に対する内視鏡的治療後胃)

日本は胃癌が多く、また世界的に見ても日本でのピロリ菌感染率は高いといわれています。早期胃癌に対する治療後の胃で除菌により癌発生が半分以下に抑制され、胃癌発生の予防効果があることが報告されています。

胃癌のほとんどはピロリ菌陽性の人に発生します。ピロリ菌がいない人にはほとんど胃癌は発生しないことがわかってきました。ピロリ菌が陰性で胃癌ができることはまれで 0.9%程度といわれています。

◆胃炎(保健適用となった！)

ピロリ菌に感染すると胃炎を発症し、長期間の感染により胃粘膜が萎縮し、萎縮性胃炎になります。萎縮性胃炎が進行すると腸上皮化生が生じ、胃癌になる危険性が高くなります。萎縮性胃炎が進行する前に除菌を行うことが胃癌になるリスクを下げる事が出来ると言われ

ております。

◆2013年春ピロリ菌除菌治療の保健適応に新たに「胃炎」が追加されました。

- 1.内視鏡検査によって胃炎が確認され、ピロリ菌感染が疑われる場合
- 2.ピロリ菌に感染しているかどうかを調べ、
- 3.除菌治療を行う

この順番であれば、保険が適用されるようになりました。

感染の診断と除菌治療が行えるのは「内視鏡検査によって胃炎の確定診断がなされた患者」となっているので、感染診断を先に行なうことはできません。

◆最後に

ピロリ菌は、胃十二指腸潰瘍の原因と言われてきておりましたが、同時に胃癌の発生にも強く関係していることがわかってきました。

今回、胃炎に対するピロリ菌の除菌が行えるようになったことで、胃がんも積極的に予防に努めることが出来るようになったと言えます。

[過去の「生活習慣病教室」はこちら](#)